【追悼文】

眞野喜洋先生を偲ぶ

駒沢女子大学　　芝山　正治

本年2月の早朝，2度目の大雪の中，突然ご逝去され，言葉を失いました。享年71歳の若さでした。心よりの哀悼の意を表します。

眞野先生は，昭和49年に東京医科歯科大学大学院医学研究科を終了されました。大学院時代に故梨本一郎先生が指揮された100m飽和潜水実験に参加されましたが，突発的な事故により減圧症に罹られ，患者として高気圧酸素治療を経験されました。減圧症患者さんの気持ちを理解することが出来る貴重な専門医です。

研究業績では，オタマジャクシを急速加圧することで筋肉の断裂が起こることを発表され，モルモットの頬袋を加圧下で顕微鏡観察すると減圧性気泡が観察されること，生体に近いアガロールゲルを用いて加減圧を行うとゲル中に気泡が観察され，減圧表の評価や減圧症の予防に繋がること，減圧症治療法はUSNavyの治療表が優れていることから酸素吸入による5時間の治療表6を積極的に使い，重篤な患者さんには時間を延長するか，治療表6Aの6ATAまで加圧して2.8ATA減圧までの吸入ガスをヘリウム・酸素・窒素三種混合ガスを使うことにより治療効果が高まることなどを報告されました。

国際学会のUHMS（Undersea and Hyperbaric Medical Society）へは毎年参加発表され，国内の日本高気圧環境・潜水医学会では平成17年から昨年までの9年間代表理事を務められ，学会の基盤を固められ，多大なる貢献をされました。

レクリエーショナルダイバーに対しての気遣いも厚く，1991年に国際的機関のI-DAN（International-Divers Alert Network）をアメリカのBennett先生らと設立され，同時に日本支部（DAN JAPAN）も設立されました。緊急時の対応として24時間のホットラインを設置し，安全潜水の普及や啓蒙活動に貢献されました。

活躍は潜水部門だけではなく，呼吸保護具の分野では，1985年に国際呼吸保護学会日本支部（現在はアジア支部）が発足した当初から理事として参画され，トンネル作業や消防などの呼吸器の安全性の検証，半閉鎖式呼吸器（リブリーザー）の実証実験にも積極的に参加されました。

著書におかれましては，新公衆衛生学（1980年初版），健康スポーツのすすめ（1983年），U.S.Navy ダイビング・マニュアル（1987年），安全と健康のダイビング科学（1992年），高圧環境と健康（1994年），NOAA（アメリカ海洋大気局）Diving manual（1996年），潜水の歴史（2001年）などを執筆されました。

私と眞野先生は，昭和49年に知り合うことが出来ました。以後，16年間東京医科歯科大学で，その後は，駒沢女子大学に移りましたが，継続して今日まで24年間，研究を含め公私にわたり，大変お世話になりました。40年間一緒に仕事をさせて頂き，眞野先生の存在はとても大きく，私の人生のすべてを占めています。先生との想い出はここでは書ききれないほど数多くあります。

東京医科歯科大学の高気圧室は昭和41年に梨本先生の時代に1号機が完成されました。私は昭和50年に東京医科歯科大学に来ましたので，減圧症治療を1号機で行っていました。当時，1号機の冷房装置が故障した状態で仕方なく治療をしていましたが，夏の冷房がない高圧室治療を経験した患者さんは，こんな過酷な状態での治療であれば，もう二度と減圧症に罹らない潜水をしますと言われたことが印象深く残っています。その時，眞野先生は患者さんを診察すると言って高圧室に入られたのには驚きました。責任感が強い先生です。昭和53年に2号機が設置され，その後，念願の3号機が平成13年（2001年）に設置されました。3号機の設置に関しては学内への根回しをきめ細かくされ，やっとの事で世界に誇れる高気圧治療室が完成されました。現在では柳下先生が引き継がれ年間6千件以上の治療を行っています。眞野先生が残された大きな遺産だと思っています。

眞野先生の性格は，全ての人を受け入れ，ほとんどの頼みごとを聞き入れ，身近にいる私としてはヒヤヒヤしたことも数多くありましたが，そんな性格の先生を多くの方が慕って集まってこられました。偉大な方だと誰もが思っています。先生のような真似は誰もできないでしょう。

先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。